〔問 8〕　熟語の場合、たとえば“鉄棒”は“鉄”が「てつ」、“棒”は「ぼう」と、漢字をそれぞれ区切って読めた方が良いのか、それとも“鉄棒”はあくまで二字で「てつぼう」と読む方が良いのですか。

〔答〕　最初は「てつぼう」と読ますべきで、後に鉄は「てつ」、棒は「ぼう」と自分の力でわかるようにさせるべきです。教育者は教えなければいけないことと、教えてはならないことの二つがあることを理解しなければなりません。教師だからといって何でも教えればいいのではなく、教えてはならないことと、是非とも教えねばならないことがあります。教えなくてはならないものは、教えなければ絶対に子供にわからないことです。子供は生まれながらに何もかも知っているわけではありませんから、いちどは教えてやらなければいけませんが、教えてやらなくてもわかる、ということもあります。これが鉄棒だということは教えなければわかりませんが、それがわかれば、鉄棒が二つの部分から成っていて、上の字が「てつ」で下の字が「ぼう」だ、ということは想像や察しでわかってくるものです。そういうもの――想像や察しでわかるもの――は教えない方がよいのです。子供が自分で鉄は「てつ」、棒は「ぼう」とわかったその時に、その子を大いにほめてやるのです。ほめることによって、子供は大きな自信をもつことになります。教わらなかったことが自分でもわかる――これが発見の喜び、人間の人間らしい喜びですので、できるだけこの発見の余地を残しておくことが大切です。私の園で実際あったことですが、ある先生が子供達に「悪魔」という漢字を教えようとした時、子供達が「自分たちに考えさせてください」と言いました。考えてもわかるまいと高をくくっていたところ、まず子供たちが自分たちの知っている漢字、心と鬼があることを発見しました。そこであるひとりの子供が、新聞でみた「凶悪犯人」から悪を思い出し、悪い鬼のようなものだったら「あくま」だろうということで、ついにわかってしまったそうです。子供は、教えてやらなくても自分で考え出すという力をもっているもので、ひとたびその力を発揮すると、発見することが楽しくてしようがないものです。教えてもらって物知りになるよりも、自分で発見して物知りになる方がはるかに楽しいのです。ですからあまり教え過ぎたり、何でもかんでも教えるのが良い教師ではなく、教えないで子供達に考え発見させる余地のあるものは、全て残しておくことが必要です。そして子供達が発見するまで待つということが大切です。考えてわかるまでの時間を与えることが大事です。先ほどの話に戻りますが、子供達にちょっとした時間を与えて考えさせればわかるものや、思考力を育てる意味で考える過程が大切な事柄は、これは絶対に教えてはならないことです。